

第7回

「日記にみる人々の暮らし-幕末維新の動乱を背景に-」

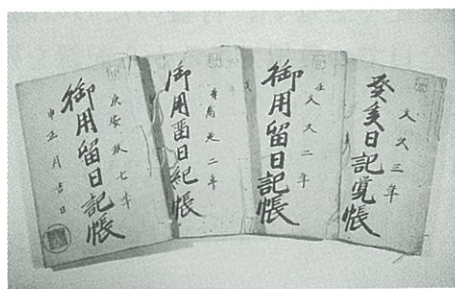
平成15年（2003）

150年前の嘉永6年6月3日（1853年7月8日）、黒船4隻を率いたアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀沖に来航しました。これを契機に幕末維新の動乱がはじまり、15年後に明治維新を迎えます。第7回の歴史講座は、多摩各地に残る日記を通して幕末維新に生きた人々の様子や出来事を探る講座といたしました。

- | | | | |
|------|----------|----------------------------|----|
| □第1講 | 7月6日(日) | 「里正日誌」からみた村の幕末維新 | 66 |
| | | 講師 森 安彦（中央大学教授） | |
| □第2講 | 8月3日(日) | 筏商いと集落生活の細密画・儀三郎日記 | 67 |
| | | 講師 石井 道郎（五日市古文書研究会代表） | |
| □第3講 | 9月7日(日) | 公私日記にみる幕末期の柴崎村と女性 | 68 |
| | | 講師 河野 淳一郎（公私日記研究会会員） | |
| □第4講 | 10月5日(日) | 富沢家日記にみる多摩の村人の動向 | 70 |
| | | 講師 高木 俊輔（立正大学教授） | |
| □第5講 | 11月2日(日) | 天然理心流と新選組-小島日記にみる情報ネットワーク- | 71 |
| | | 講師 小島 政孝（小島資料館館長） | |
| | | 小島政孝「新選組ブームとその後」 | |

定員 70名

場所 多摩交流センター



富沢家日記（国文学研究資料館・史料館蔵）

第1講 「里正日誌」からみた村の幕末維新

森 安彦（中央大学教授）

1 「里正日誌」の構成と特質

- * 全66冊。領主側に出したたてまえと事実の両方の記録
- * 日記を記した内野家は旧家。1602年より武蔵国蔵敷村に居住。江戸時代中頃から名主
- * 内野左衛門敷隆（号星峰）・徳隆親子（秀峰）が幕末期・維新时期の里正日誌をとりまとめた。

2 代助郷免除獲得過程

幕末期、幕府は江戸湾防備強化のため、元治元年（1864）から焰硝蔵（火薬庫）を武蔵国多摩郡和泉新田（東京都杉並区）と同国豊島郡千駄ヶ谷村（同新宿区・渋谷区）に設置

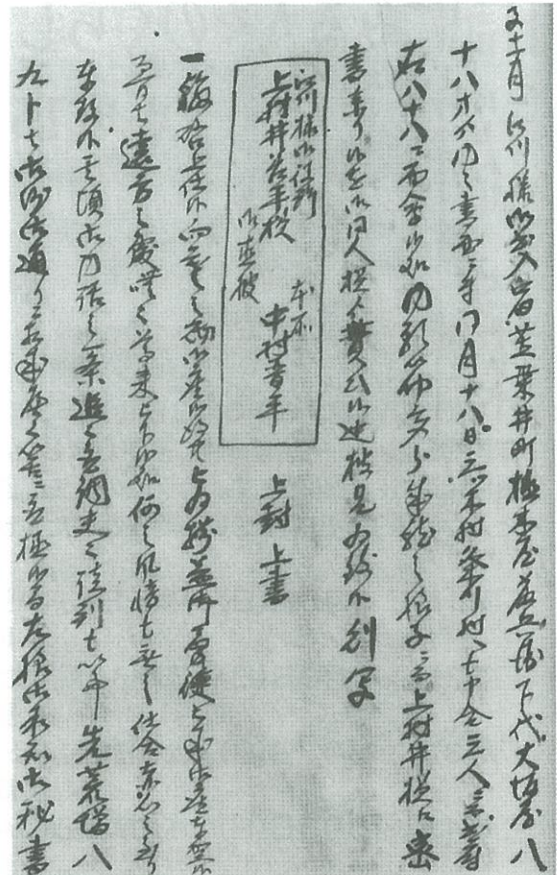
…内藤新宿助郷村々から一部の村を焰硝蔵警固に回して、助郷を免除

→代助郷の多摩郡村々への賦課が決定
蔵敷村名主左衛門の助郷負担阻止嘆願
・普段から困窮の村々、天保飢饉以来代官所から支給のお救い米の返却中

- ・尾州様の御鷹場御用負担
- ・甲州道中小仏閣所の番人足



とりあげてもらえず。秘密裡の行動へ。
…代官江川太郎左衛門手附元締・上村井善平を訪ね、助郷免除が成功した暁には、相当の謝礼をすることを条件に、特別の便宜を、上村井を通して普請役中村晋平・横山信太郎に働きかけた。



里正日誌より「内密書」（東大和市教育委員会編『東大和市史資料編7 里正日誌の世界』より転載）

〈『里正日誌』上の記録〉

元治元年：9月27日、10月2日・3日・21日・26日、11月12日、11月20日…私腹を肥やさない、村益のための賄賂、村全員での負担であるから記録を残した。

3 幕府の崩壊と村落自衛

*慶応4年4月大政奉還、幕府権力崩壊後、村の制裁権を発動した一件

*慶応年間に起きた百姓二人による武士2人の斬首事件。両方が下記の通り、里正日誌に記されている。

〈江川太郎左衛門代官所届出〉

「辰閏四月十八日盜賊打殺之儀ニ付芋久保村より届書」

〈事実〉

「辰閏四月十六日賊徒式人打殺候始末事
実」

参考文献

『里正日誌』第七卷・第九卷・第十卷 東
大和市教育委員会 1994～1996年

『東大和市史資料編7 里正日誌の世界』
東大和市史編さん委員会 1997年

平成15年8月3日 午後1時30分～3時30分

第2講 筏商いと集落生活の細密画・儀三郎日記

石井 道郎（五日市古文書研究会代表）

儀三郎日記

西多摩郡戸倉村星竹（現あきる野市戸倉）農林業黒山儀三郎（1833・天保4～1912・明治45）による、安政6年10月1日～明治41年5月31日の正味50年に亘る日記。横半帳十三冊。



儀三郎日記（あきる野市五日市郷土館蔵）

1 日記の内容

①家業の記録

*農業 米・麦・雑穀・芋・大豆・野菜類の播種、介作・収穫 後に養蚕が加わる

*林業 山林の買付・伐採・搬出・土場^{どぼ}作業（筏の組立）・筏川下げ六郷迄（通常三泊四日筏乗り請負制）

②集落生活の記録

*冠婚葬祭

*相互扶助：屋根替え、（四年に一回）田植え等

*講：頼母子・伊勢・榛名・大山・天神・聖徳太子・水神・念仏

*娯楽：人形・芝居・祭文・幻燈・ごぜ^{さいもん}

*日待

*病気（重病者）見舞 おこもり・川ごり・お百度参り

*雨乞い・天気祭り

③親類づきあい

2 日記にみる維新期の様相

①時代の移り変りの概要

*明治2年（版籍奉還）

旧領主との関係が濃く、旧幕時代の年貢・伝馬の賦課も残る＝領主への献納木の記録。経済も不活発

* 明治4年（廃藩置県）

維新政府の施策始まる。宗門人別帳の廃止・寺社領の没収・新戸籍法・新貨条例の制定—明治五年の地租改正へ

* 明治6年（太陽暦の採用）

②各分野での変遷

* 時刻の表示

* 通貨

* 交通手段

- ・人力車：儀三郎出京中はよく乗る
- ・乗合馬車：明治5年より神田橋～府中。儀三郎は出京に専ら利用。
- ・玉川上水の乗合船（明治3年4月15日～5年5月末）：2年間で廃止。儀三郎は二度利用する
- ・鉄道：新橋～横浜間、明治5年9月開通。明治6年2月16日「品川よりおかくるまぶね陸車船に乗り川崎宿へ出る」

* 断髪

3 家父長制社会の実態

①厄介おじの問題

戸主からみて叔父叔母、また戸主の兄弟姉妹で30歳を超える者（傍系家族とそれに準ずる者）をあげると7戸（男4名、女3名）がみられる。これは全戸の3分の1。男の傍系者は富農にいる。富農は田畑山林をもち男子の労働力を必要とするが、貧農は次三男を早く手離さねばならない。

②養子・養女の実態

* 婿養子と年季奉公人的な養子

* 正常な養女（夫婦養子の場合）と妾的な養女がある

戸主（長男）絶対性（いわゆる家父長制）は、生産性の乏しい第一次産業にのみ依存している社会の必然の結果。

参考文献

『儀三郎日記』（一）～（五） あきる野市教育委員会 1998～2004年

平成15年9月7日 午後1時30分～3時30分

第3講 公私日記にみる幕末期の柴崎村と女性

河野 淳一郎（公私日記研究会会員）

1 「公私日記」

①「公私日記」の特色

- * 筆者…武蔵国多摩郡柴崎村（現立川市）の名主鈴木平九郎重固（文化4年・1807～元治元年・1864）の日記。
- * 構成…天保8年（1837）～安政5年（1858）。23冊からなる。安政4年と5

年は「公私見聞録」と題された日記抄で一冊になっている。弘化2年（1845）を欠く。

* 刊行

- ・立川元市長の鈴木清宅に秘蔵
- ・昭和47～58年まで立川市教育委員会により翻刻、20冊に分けて刊行

*特色

- ・名主としての村の公用記録と鈴木平九郎及び鈴木家の私的日記の両性格
- ・極めて客観的に記述。後世のために記録するという明確な目的

*内容

- ・毎日の天候、村に係る事柄及び人々の動き、家庭内の事、物価の動向、同時期の社会情勢、幕府の法令内容と役人の動静、鈴木家の農業記録、祭礼等の運営等

②公私日記研究会

- *昭和51年6月に組織
- *伊藤好一氏を講師として毎月2回の輪読・研究会。短期間の中断もありながら現在まで続く。
- *2002年から『公私日記』改訂版出版の校正作業中

2 柴崎村名主の妻

①中島春の金融活動と村

- *柴崎村は畑がち。幕末は養蚕が発達
- *中島春（中島母）＝十代中島次郎兵衛敬成妻・春
- *金融業を行い、50両・100両という大きなお金の動かし富を集積。

②鈴木嘉代の活動と公私日記

- *鈴木平九郎重固妻
- *中島母ほどではないが金融業
- *嘉代の金と平九郎の金、鈴木家では別々に扱っている。
- *結婚前に内藤紀伊守屋敷で武家奉公
- *平九郎が3ヶ月伊勢参りの間、嘉代が公私日記を記す。
- *子どもの手習い：多摩でいちばん古い寺子屋の記述
- *日待ちの際の料理について：当時の多摩の料理の史料

③鈴木つねの武家奉公

- *平九郎・嘉代の娘・つね（ため）

- *内藤紀伊守へ武家奉公、目を悪くしてやめる。再度の武家奉公を望んだ際の記録が残る。

3 異国船来航と村

①異国船来航の情報

- *オランダ使節の来航
- *ビッドルの浦賀来航
- *ペリーの来航

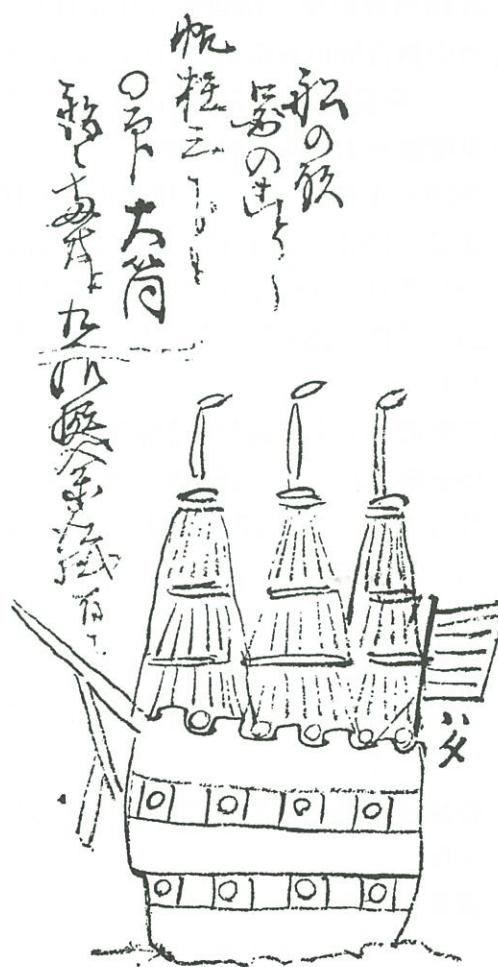
②海防御普請献金と村

- *「寇防私策」
- *海防献金

*献金と異船見物

③鈴木周介の長崎随行

- *周助の長崎随行計画



公私日記に描かれた黒船（立川市教育委員会編『公私日記 第九冊』より転載）

第4講 富沢家日記にみる多摩の村人の動向

高木 俊輔（立正大学教授）

1 「富沢家日記」について

- * 天保14年（1843）～明治41年（1908）まで66冊におよぶ日記
- * 縦帳・縦書き
- * 村役人として、家の私的な事柄も記録

2 幕末維新の政治情報記事

- * 幕末政情一般記事
桜田門外の変（1860年3月4日）、水戸中納言徳川斉昭逝去（1860年8月29日）、和宮降嫁（1861年10月27日）等
- * 試衛館および新選組記事
1859年4月12・28日、1860年9月16・30日、1861年2月16日・8月20・27日・10月3日、1862年1月20日・3月19・20・25日、1865年4月13日、1868年3月6日
- * 日野農兵および武州一揆記事
1865年12月7日、1868年5月6日・6月1・15・16・17・19日・7月1・15・21・27日
- * 彰義隊・振武隊関係記事
戊辰期の政情：1868年2月10日・3月4・6・7・10・16・22日・4月5・16・17日
彰義隊：1868年閏4月27日・5月16・18日
振武隊（振武軍）：1868年5月3日・4日・11日・24日・25日

3 富沢家と村に住む人々

安政3年から明治3年までの15年間の日記から名前の記事分類毎の出現回数。

①名主忠右衛門・妻うめ

- * 15年間に853件（名主忠右衛門700・妻うめ153）の記事が見られる。
- * 出府関連の記事が多い（94件。村役人、旗本天野家人事関連その他）
- * 妻うめの在所・大沼田関係、縁談関連の記事も多いが、政情が厳しくなると少なくなる。
- * 信仰関係も多い。

②下男たち（富士太郎・弁蔵）

- * 下男・富士太郎：富沢家の雑事を任せられた者
- * 馬士弁蔵：馬での運搬専門の下男。米麦運搬、次いで木材・槓。土石運搬の記事が多い。

③分家奥右衛門と村役人たち

- * 分家の記事は比較的少ない。
- * 分家奥右衛門は村の金庫番

④近隣の人々

- * 百姓代平八は名主忠右衛門に何かと付いて動いている。慶応期以降は記事が少なくなり（老齢か？）、代わって百姓代忠五郎が頻出する。忠五郎は実務家

おわりに

日記は拾い読みでなくぜひ全体を読み解いてほしい。その中で、150年前の人物像が浮かび上がるのではないかと？

参考文献

国文学研究資料館・史料館編『史料叢書5 農民の日記』名著出版 2001年

平成15年11月2日 午後1時30分～3時30分

第5講 天然理心流と新選組

—小島日記にみる情報ネットワーク—

小島 政孝 (小島資料館館長)

- 1 小島日記
 - ・天保7年から大正10年の86年間の日記
 - ・角左衛門の伊勢参り中、息子の鹿之助が書く。その後、角左衛門と鹿之助の日記が17年間重なる。
 - ・沖田総司麻疹の記事（文久2年7月15日）…沖田総司のいちばん早い史料
- 2 小島日記、近藤勇の書簡にみる、「池田屋事件」情報のやりとり
 - *池田屋事件15日前(元治元年5月20日)の書簡
勇にとっての新選組の目的：幕府命令での攘夷の際の先駆け。しかし幕府は攘夷の予定はない。→解散したい→京都警固に手薄のため月番老中酒井雅楽頭に慰留
 - *近藤勇の鎖着込みに関する記録
 - ・文久元年4月20日『小島日記』
 - ・同年6、7月頃 近藤勇書簡 小島鹿之助宛
 - ・文久3年1月16日『小島日記』
 - ・元治元年6月5日池田屋事件で着用
 - *近藤勇の佩刀に関する記録
 - ・文久3年10月20日 近藤勇書簡
「大小虎徹入道、鍔信家、馬三疋、其外一統武器差支無之候」（小島資料館蔵）
 - ・佐藤 著『聞きがき新選組』
大阪の豪商鴻池家からもらった。無銘の虎徹
 - ・元治元年6月8日 近藤勇書簡
「下拙之刀ハ名剣虎徹故候にや無事ニ御座候」（小島資料館蔵）
- 3 近藤勇戦死の噂と情報の伝達（「元治元年の多摩における新選組の動向」『多摩のあゆみ』第21号より）
〈元治元年〉
 - 5・20 近藤、新選組を解散したい旨を申し出たが、京都に留まるように慰留。
 - 6・5 池田屋事件
葦山代官手代→佐藤彦五郎→小島鹿之助着（6・17）
 - 6・8 近藤勇の書簡（6・19着）
 - 7・19 禁門の変起こる
〈禁門の変〉
 - 7・25 京都大火
 - 7・26 去る19日京都大騒動の趣
 - 7・27 日野の佐藤彦五郎に安否を尋ねる
 - 7・28 江戸で京都大火を知らないものはない。小林氏の書簡届く。近藤討死の様子。
 - 8・1 7・1付の近藤・土方の書簡を添えて佐藤の書簡着
28日に佐藤は江戸に使いを立てた。使いの者は31日近藤周斎宅と柳町によったが情報なし。大沢の宮川氏は、30日に江戸の会津公の屋敷を訪問、書類に近藤討死の記事なし。31日に近藤、

土方の書簡を持参して、佐藤宅に届けた。

- 8・11 下小山田村丹次郎の情報→近藤勇討死のうわさ
- 8・12 彦五郎に託し、京都飛脚を買い彦五郎、鹿之助、橋本道助、石阪昌孝らは、近藤、土方、沖田、山南敬助、井上源三郎にあてて書簡を出す。
- 8・23 佐藤→鹿之助に書簡届く。宮川総兵衛、沖田林太郎の書簡同封
- 8・24 鹿之助江戸より帰宅 江戸のう

わさ、「近藤はまさしく武士である」関東取締出役でも近藤のうわさでもちきり

- 9・4 京へ遣わした飛脚戻る。近藤返書もあり、無事を確認。くわしくは宮川総兵衛より聞いてほしいとある。

参考文献

小島日記研究会編『小島日記物語』小島資料館 2001年

新選組ブームとその後

小島 政孝（小島資料館館長）

私は「多摩の歴史講座」第7回「日記に見る人々の暮らし」の第5講の講演をした。テーマは「天然理心流と新選組—小島日記にみる情報ネットワーク」である。平成15年11月2日であった。

翌16年1月からはNHK大河ドラマ「新選組！」が放映された。三谷幸喜脚本は、最初のシーンで近藤勇、土方歳三、坂本龍馬、佐久間象山、勝海舟が一堂に会したため、史実と異なることから視聴者の不評を買った。

しかし、3月まで多摩地区が放映され、佐藤彦五郎、小島鹿之助、宮川音五郎らも登場した。多摩と近藤・土方のつながりが綿密に描かれていた。大河ドラマのテレビ放映の効果は凄まじく、新選組は今まで歴史家と無縁の人たちの研究が多かったが、『歴史の中の新選組』宮地正人著、『新選組』松浦玲著などによって学術的評価がされたことが特筆される。京都においては、以前は新選組の史料にはあまり関心がなかったが放映後は、いろいろの所から新選組の史料が発掘された。

多摩においての最大の収穫は『佐藤彦五郎日記』の発見であったろう。私は講演の中で、多摩の新選組あるいはそれ以前の天然理心流時代に近藤勇や土方歳三を支援した人々について述べた。この研究はあまり進んでいないので、これからの新選組研究においては、重要なテーマである、私は考えている。

多摩地区は、幕末の日記が多く残っている地域であると思う。天然理心流関係でも、『小島日記』『小島角左衛門聴書』『佐藤彦五郎日記』『富沢忠右衛門日記』『本田覚庵日記』『比留間七重郎日記』などがあり、大変参考になる。今後の研究に期待したい。